

選評

作家 盛田隆一

平成二十四年度に「川越市市制施行九十周年」を記念して創設された「高校生小説大賞」。小説創作を志す高校生諸君の好評を得て七回目を迎えた。今年度は応募総数が二十一作品と例年に比べて少なかったが、入賞作品は傑出した力量を示す力作ばかりで安堵した。

最優秀賞に選出した當堂流美菜さん（狭山ヶ丘高等学校二年）の「猟犬物語」は、応募作の中で一番の異色作だった。

小一の夏休みに捨て犬を拾い、猟犬として育てる少女の物語。狩猟が趣味の父親と二人で飯能や嵐山や鎌北湖を回り、カモやキジやヤマドリを銃で撃つ日々を描くこの一編は、ジャック・ロンドンの『野性の呼び声』を彷彿させる。

選考会では「ディテールは丁寧だが、ですます調が作文のようだ」との指摘もあったが、高校生になった「私」が、小学生の自分を「ルーちゃん」と呼び、ルーちゃんと猟犬ルガンドの六年にわたる交流を記録するには、やはりこの文体が最適だと思う。猟犬のくせに泳げず、まるで溺れた人のように川でバチャバチャと暴れもがいて

いたルガンドは、やがて犬かきで泳げるようになるが、そうして成長していく飼犬の姿に感嘆するルーちゃんの幼い感性と「豊猟の年でも終猟の不猟の寂しさはいつまでも尾を引くから不思議です」と回想する高校生になった「私」の距離の取り方が絶妙で、作品の世界をとても豊かなものになっている。

続いて、優秀賞。塩野貴弘さん（県立川越高等学校三年）の「ある春の日に少女は微笑む」は、ある大きなマンションを目にすると、懐かしさがこみ上げると同時に、息ができなくなるほどの狭心の発作に襲われる男子高校生の物語。

そのマンションで過去に何か忌まわしい出来事が起きたが、自己防衛本能により、自ら無意識のうちにその記憶（トラウマ）を欠落させている。そのような設定で始まるこの作品は、いかにも小説の企みに満ちた力作。いくつもの伏線を張りながら、それらを一つずつ丁寧に回収し、謎解きをしていく。考え抜かれたプロットにはひどく感心させられたし、過去のくびきを逃れて未来に思いを馳せるエンディングもよかった。

もう一作の優秀作は、野城知里さん（星野高等学校一年）の「レーザービーム倶楽部」。こちらは前二作と趣きを大分異にする。「毒キノコの育て方」「怪獣の卵凶鑑」「不登校完全体」といった奇天烈なタイトルの本を愛読

する女子高中生に感化されて、クラスの十二人が腹部からレーザービームを出すサークルを作る。毎日グラウンドの隅で精神的エネルギーを統一し、気を一か所に集める練習をこつこつと続けるうちに、もちろん誰も信じていないのに、何か爽やかな連帯感が生まれる。

さて、この短編、どのようなオチを付けるのか、少し心配しながら読んだのだが、エンディングも愉快で、現代の高校生気質をポップに描いて見事だった。

梅谷理々加さん（栄東高等学校三年）の「星空の向こうへ」は、ライバルにケガを負わせた男子バスケット選手が、相手への謝罪の気持ちより許されたいと願う気持ちが勝るのは自分のエゴではないかと思ひ悩む。一方、相談相手になる天文部の女子も、自分は人に嫌われたくないだけの八方美人ではないかと悩んでいる。この二つの悩みが響き合い、自分の誇りを回復するラストまで物語を牽引していく。ストーリーの進め方にやや強引な箇所もあったが、全体として破綻なく、よくまとまっている。

酒井郁さん（星野高等学校三年）の「音に耳をすませ」は、ピアノが得意な少年が主人公。自分より実力のある天才ピアノ少年が現れて、ピアノを弾くのをやめてしまう。やめれば自分にとってピアノとは何なのか分かんと思うたが、やはりその答えは出ない……。酒井郁さんは昨年度に続いて二度目の奨励賞。とてもリーダーダブル

な文章で、少年が再びピアノを弾くまでの過程を丁寧に綴っているが、文章をもう少し刈り込んで抑制を効かせれば、さらに物語の緊張感が増したと思う。

吉野未佳哉さん（川越東高等学校一年）の「環る」は、不登校で家に引きこもり、ゲームで現実逃避していた高校二年男子の物語。ある日、彼は家出をする。そして様々な人と出会い、未知の経験を重ねるうちに、自分と社会の関係性に目を開いていく。母親の秘密をめぐるエピソードなど、プロットに工夫が凝らされて感心したが、偶然のあまりの連鎖が気になった。偶然の連鎖と思われためぐり逢いには、実は大きな必然があった、という結末にたどりつくのは至難の業だが。

以上、奨励賞の作品も、いずれも劣らぬ力作・快作だった。近い将来、皆さんの中から僕のライバルとなる小説家が誕生することを大いに期待したい。

埼玉大学教育学部教授 武田ちあき

私が子どもの頃、親に聞いて「へええ〜!」と思った話のひとつに、「大正天皇は議会で、読んだ紙を丸めて目に当て、望遠鏡にした」というのがあります。この「大正天皇遠眼鏡事件」は、信憑性については諸説紛々のよ

うですが、天皇陛下なのに人間らしくてユーモラスで、なんだか好きな逸話でした。

思えば小説とは、この大正天皇の紙のようなものかもしれない。何の仕掛けもない、ただの紙なのに、それが覗き眼鏡となつて、別の世界を見せてくれる。現実を一瞬離れて、過去へ、未来へ、あるいは、現在の裏へ。丸く切り取られた窓の向こうには、思いもかけない物語が展開していて、その体験は、その後で戻ってきた現実に、別の見方を与えてくれるのです。

すでに出来上がっている社会に縛られず、自由に「もうひとつの世界」を構築するという、小説のオルタナティブな本質は、小説というジャンルを生み出した時代と社会に由来します。

一八世紀、イギリスの海洋発展と植民地貿易を支えたのは商人でした。この新興市民階級は、支配階級の貴族が持つ政治力こそなくとも、経済力と社会的発言力を増大させていきます。

かれら中産階級は、政権を担当していないからこそ、権力や体制から一步おいた立場で、自由に言論や表現ができました。現状を客観視する姿勢、相対化する視点は、揶揄・嘲笑・皮肉・風刺・批評・批判・糾弾といった形で、新聞・雑誌などのジャーナリズム、そして小説の誕生につながりました。

「小説」"novel"とは、もともと英語では「新しいもの」、「新奇なもの」、「革新的なもの」という意味です。

これまでになかったものを創り出すこと、それが小説の真髄です。それゆえ、この小説ジャンルの黎明期には書簡体小説・パロディ小説・悪漢小説・感傷小説・恐怖小説・実験小説など、多様なサブジャンルが登場し、すでに百花繚乱の観を呈します。

「こんなもありだったか」という発見の驚き、頭を使うことの喜びと楽しさ、人がやらないことをやってみせる企み——中産階級の商才と出世にもつながる心性、「創意と工夫」こそが、小説の中心でした。

明治政府が英国に送った留学生、夏目金之助は、ロンドンで一八世紀以降のイギリス文学を学び、やがて帰国して漱石を名乗り、日本の近代小説の祖となるのです。

小説というジャンルには、このようなルーツがあります。小説で、夢を見るのもいい、逃避するのもいい、贖罪するのもいい。でもそこに「^{ノベル}創意と工夫」がなければ、それは小説ではない——英文学者には、そんなふうに思えます。

今回の入賞作は、いずれも高校生なりに、その小説の本質をとらえた作品です。これからも川越のみなさんが、どんなもうひとつの世界を覗かせてくれるか、楽しみに

しています。

埼玉県立川越西高等学校長 白倉 克典

今回の小説大賞には二十一人の高校生が応募してくれました。入選に至らなかった中にもいい作品が多く、まずは頑張って作品を仕上げてくれた応募者全員に拍手を送りたいと思います。皆さんの作品は、それぞれに自分の世界をしっかりと持っていて、「うまいなあ」「なるほど」と思わせる魅力に溢れていました。

まず、作品の展開についてですが、小説を読む楽しみの一つが、自分の実体験から離れた世界を見せてくれるところにあると思います。ページを開くと空間的、時間的に遠いところ、時に非現実の世界や深い心の世界まで、とにかく異なる世界に案内してくれて、その世界を疑似体験させてくれる。今回もそんな楽しい思いをたくさんさせてもらいました。旅の話、不思議な出来事、異国の物語、デリケートな人間模様……。高校生が繰り出す自在でアイデアに富んだ展開は、読んでいてとても楽しいものでした。

登場人物の描き方が上手なのも印象的でした。創り出された人物であるにもかかわらず、一人一人が個性的で生き生きしていました。弾むような会話も、一人の作者

の手の中でキャッチボールされたものではなく、それぞれの人格を持った生の人間同士が、本気の会話を交わすように展開していくところ、とても面白く、作者の力量を感じました。

ある一場面の描写が、特に印象に残る作品もありました。作者がそのような効果を意図して書いたのかはわかりませんが、映画の一シーンのように頭に残り、後に振り返った時に、作品を象徴する大切な情景として真っ先に浮かんでくる、そんな場面を持っている作品がありました。設定の妙、描写の妙なのでしょうか。印象的な場面を描き出す力、なかなかのものだと思います。

心理描写もレベルが高かったと思います。登場人物の細かい心の動きまで丹念に描いていて、読みながら自然と感情移入して、こちらの心まで動かされてしまう作品がありました。これは作者の内面と通ずるところがあるのか、あくまで創作なのか。いずれにしても繊細な感覚を持つていないと書けないと思います。作者自身の心の豊かさ、奥深さが想像されました。

今回の応募作品には、主題がきちんとしていて、イメージする力、構築するセンス、確かな筆力、そういうものがしっかりとかみ合った、読み応えのある作品が多かったと思います。まだ人生経験もそれほど多くない高校生が、ここまでの作品を作り上げる力を持っているこ

とに驚くと同時に、これからどれだけ伸びていくか、将来がととも楽しみです。皆さんの今後のご活躍をお祈りするとともに、来年も多くの高校生がこの小説大賞にチャレンジしてくれることを期待しています。